

メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか

Karsten 氏に據れば、現今、山西省の文水・興縣・平陽等の方言では、明泥娘疑母の頭音が [m] [n] [ŋ] のやうに發音されるといふ。又、白滌洲氏の調査に據れば、類似的發音は、陝西省の安塞・延川・清澗・吳堡・綏德・米脂等にも存在するといふことである。昭和十二年、重慶出身の漆宗棠氏(東大言語學科卒業)が歸國されようとする前夜に一時間程對談の機會を得た際、同氏の米・你等の發音が殆どピ・ヂと聞えるのに氣付いた。そこで、改めて發音してもらつてよく聽くと、その實は [m] [n] のやうな音である。(ところが、御當人は、自身の發音上のかかる特色に全然氣付いて居らず、完全な m n であると主張して、椀子でも動かない。)この破裂音的要素は、民 [m'in] 寧 [n'in] のやうに鼻音で終る音節に於ては、かなり弱くなる。さうして、馬 [ma] 魔 [mo] 那 [no] のやうに開いた母音の前に立つ場合には、完全に消失してしまふのである。後舌音の場合は、これとは少し状態が違ふ。即ち、我 [go] 礙 [ge] のやうに開いた母音の前に立つ場合でも、破裂音的要素は常に明瞭である。併し、岸 [an] のやうに鼻音で終る音節に於ては、頭音は純粹な鼻音である。

さて、羅常培氏の「唐五代西北方音」(10頁)に據れば、唐代に於ける吐蕃の音譯例では、明母は、m, n で終る音節では、m に相當するチベット文字で表されて居り、その他の音節では、n に相當するチベット文字で表されてゐるのを原則とする。例へば燉煌發見の千字文では

- (1) 磨 ^{註一}ba 摩 ^{註二}ba 寐 ^{註三}ba 茂 ^{註四}bu 門 ^{註五}bun 蜜 ^{註六}bir 滅 ^{註七}trar 漠 ^{註八}bag 逸 ^{註九}byas 陸 ^{註十}bag 牧 ^{註十一}bae 目 ^{註十二}bae

メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか

(2) 銘 me 邛 no 眠 myan 勉 myan 面 myan 綿 myen 明 men 盟 men 孟 men 註六

次に、泥母は、*n, m* で終る音節では、*ŋ* に相當するチベット文字で表されて居り、その他の音節では、*ŋ* に相當するチベット文字で表されてゐるのを原則とする。千字文の例で見ると、

(1) 納 'dab 内 'dei

(2) 曇 no 寧 ne 南 nam 農 non 註七

但し、*ŋ, ɲ* の *ŋ* は、一種の鼻音を表すものであつて、従つて、*ŋ, ɲ* を以て寫されてゐる支那原音は、現今山西・陝西等の諸省の一部に存在する [mb] [nd] の如き音であつたらうと言はれてゐる。註八つまり、唐代の西北支那方言では、明母・泥母の頭音は、一般には [mb] [nd] のやうに發音されたが、[m] [n] のやうな鼻音で終る音節では、尾音の影響を受けて、純鼻音 [ŋ] [ɲ] の形で發音される傾向が有つたらしいのである。

ここに西北支那方言と言つたが、吐蕃によつて音譯された支那音が、果して甘肅方面の邊地の音に過ぎなかつたものであつたらうか、それとも長安を中心とする標準音であつたらうか、その點は未だ明かでない。併し、いづれにしても、明母・泥母等の頭音に關し、長安標準音にも亦同様の傾向が有つたことは、當時の悉曇對註の例によつて知られる。例へば大日經(西紀七二五年、善無畏・一行共譯)字輪品には、

ta 多 tha 他 ta 娜 tha 駄 na 囊 pa 波 pha 頗 ba 麼 dha 婆 na 莽

の如く、泥母の娜 [nda] を梵音 *da* に充て、泥母の囊 [na] を梵音 *na* に充て、又、明母の麼 [mha] を梵音 *ha* に充て、明母の莽 [ma] を梵音 *ma* に充ててゐる。

唐代の西北支那音、殊に長安音にこの特色が有つたものとすれば、我々にとつて期待されることは、もしや同様な

事實が我が國の漢音に反映してゐるはしないかといふことである。そこで、試みに、正倉院御藏の舊鈔本蒙求（南都祇
極の一として複製されたもの）に就いて、明母の字を調べて見ると、まづバ行の形になつてゐる例は、

- 沐（ホク）遊（ハク）模（ホ）枚（ハイ）米（ヘイ）買（ハイ）密（ヒツ）蜜（ヒツ）冕（ヘン）毛（ホウ）
- 苗（ヘウ）廟（ヘウ）妙（ヘウ）馬（ハ）母（ホ）墨（ホク）隲（ホク）

であつて、ただ冕の一字を除く外は、音節の末尾に鼻音を持たないもののみである。之に對して、マ行の形になつて
ゐる例は、

- 門（モン）孟（マウ）命（メイ）明（メイ）萌（マウ）

であるが、この方は二つ残らず、音節の末尾に鼻音〔m〕〔n〕を持つもののみである。次に、泥母の字を調べて見る
と、まづダ行の形になつてゐる例は、

諾（タク）

の一字のみであるが、これは勿論音節の末尾に鼻音を持たないものである。之に對して、ナ行になつてゐる例は、

- 囊（ナウ）寧（ネイ）甯（ネイ）南（ナム）

の四字であるが、この方は一つ残らず、音節の末尾に鼻音〔n〕〔m〕を持つもののみである。我々は、ここに、羅常
培氏が吐蕃の音譯例について發見した特色と殆ど完全に一致するものを、我が漢音に於て發見し得たのである。これ
必ず唐代の西北支那音に實在した特色を傳へてゐるものに相違無い。

因みに、吐蕃の音譯例では、娘母は女 𑖀 尼 𑖀 三 𑖀 の如く 𑖀 𑖀 𑖀 を以て寫されてゐる。蒙求でも、女（チヨ）匿
（チヨク）の如く二字ともダ行の形になつてゐる。微母は、微 𑖀 務 𑖀 晚 𑖀 勿 𑖀 等 𑖀 の如く 𑖀 で寫され、

メイ（明）ネイ（寧）の類は果して漢音ならざるか

或は味 *byi* 聞 *bun* 志 *hon* 物 *bur* 等の如く *h* で寫されてゐる。蒙求でも、武 (フ) 霧 (フ) 文 (フシ) 聞 (フシ) 望 (ハウ) の如くすべて *b* 行の形になつてゐる。日母は耳 *ni* 弱 *ka* 人 *jin* 然 *zen* 染 *zan* 等の如く *n* を以て寫されてゐる。蒙求でも、戎 (シウ) 二 (シ) 儒 (シユ) 日 (シツ) 乳 (シウ) 任 (シム) 冉 (セム) 髯 (セム) の如くすべて *z* 行の形になつてゐる。これら亦、何れも吐蕃の音譯例と蒙求の字音との間に於て特色の相一致する點である。(マスベロ氏は、唐代の長安音に就き、鼻音で終る音節では微母や日母の頭音までが純鼻音に發音されたものやうに考へてゐるが、それは我々の資料の示す所とは一致しない。)

さて、反切のみから推論すれば、明 (武兵切) 鳴 (同) 命 (眉病切) 等の漢音は當然 *bei* なるべく、又、寧 (奴丁切) 甯 (乃定切) 等の漢音は當然 *dei* なるべきやうに想像される。又、法華懺法や例時作法の所謂天台漢音には、現に明 (ベイ) 命 (ベイ) 名 (ベイ) の音が見出されるのである。これらの字の吳音は、保延二年書寫の法華經單字や心空の法華經音訓に據れば明 (ミヤウ) 鳴 (ミヤウ) 命 (ミヤウ) 名 (ミヤウ) 寧 (ニヤウ) とある。ここに於て、明 (メイ) 鳴 (メイ) 命 (メイ) 名 (メイ) 寧 (ネイ) の如きは、漢音にもあらず又吳音にもあらざる音として、從來は慣用音などと呼ばれ、あたかも、後世誤つて出來た音であるかの如く扱はれて來た。

併しながら、この種の音が極めて古い時代から存在したものであることは、天皇の御尊號を、曲江集に「主明樂美御德」、令義解に「須明樂美御德」と記し奉つてゐることによつても分るのである。又、天曆二年加點の奥書ある漢書楊雄傳にも、玄冥の冥を *メイ* と點じてゐる。^{註九} 然らば、この種の音の由來する所も、天台漢音の明 (ベイ) 命 (ベイ) 名 (ベイ) に劣らず古いものである。正倉院の蒙求は神田喜一郎氏の解説に據れば七八百年前の筆とあつて、さ程古いものではないが、併し、その字音の特色に於ては、唐代の西北支那音 (恐らく長安音) の特色をかなり忠實に反映

してゐると認めらるべき點があること、既述の通りである。

そもそも、一口に漢音と言へば隋唐頃の北支那音を指すもののやうであるが、その中でも、時代や地方の相違によつて、種々異なる性質のものが有つたことは、想像するに難くない。所謂天台漢音は、いづれ第九世紀頃の支那の教養ある階級の音たることは疑無いが、それが果して當時の長安禪准音と正確に一致するものであつたかどうかは判明しない。^{註一〇} 又、長安音自體の中でも、人により場合によつて、多少の變異や動搖は有つたかも知れないのである。^{註一一} 殊に、普通の談話や朗讀の場合と、長く引いて歌ふ場合とによつて、自ら發音が相違して來ることは、考へ得る所である。

然らば、よしや天台漢音で明・命・名がベイと讀まれてゐるとしても、その故にメイは漢音にあらずと、直ちに斷定し得るものではない。況やメイ（吐蕃音譯例は明・盟 *mei* 命 *men*, 名 *men*, 銘 *me*）ネイ（吐蕃音譯例は寧 *ni*）の如き形は、その頭音に關しては、明かに唐代の西北支那音の實狀を傳へてゐるものであつて、従つて、これらも漢音と呼ぶことには、何の不合理も認められないのである。

註

(一) B. Karlgren: *Études sur la phonologie chinoise*, pp. 361-364, 367-368, 470, 481-482, 570-571 et 577-579.

(二) 羅常培氏著「唐五代西北方音」133頁。

(三) 「二」の前などでは頭音は果してどんな風に發音されるのか、聴き落したのが遺憾である。

(四) 羅氏の研究に先立ち、我が國には既に財津愛象氏「敦煌出土漢藏對音の材料と韻鏡との比較」(東洋學叢編所收)が出てゐるし、又佛人 H. Maspero 氏も *Le dialecte de Tchang-ngan sous les Tang* の中 (31-36頁) で此の鼻音の交替法則に觸れてゐる。併し、此處では、便宜上、最も詳しい羅氏の研究を引用した。

メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか

- (五) ここではただ門 *ʔun* だけが例外になつてゐる。
- (六) 銘 *ne tɕ mo* に於ては、末尾の [ɿ] 要素が消えてゐる。併し、羅氏に據れば、口腔内の閉鎖は不完全になつてゐるが、鼻音的要素は當時は未だ完全に消失してはゐなかつたらうといふ。これは、泥母の *no* 寧 *ne* 等に關しても、同じことである。(羅氏前掲書 87 頁以下参照)
- (七) 囊・寧については註六を参照せられたし。ここで終る音節の例は、千字文にはないが、大乘中宗見解には難 *nan* 暖 *nʔan* 阿彌陀經には難 *ʔan* と見えて、頭音の發音に多少の動搖を示してゐる。
- (八) 羅氏前掲書 132 頁。
- (九) 吉澤義則先生「井々竹添先生遺愛唐鈔本漢書楊雄傳訓點」に據る。なほ、顯宗紀「美飲喫哉」の訓註「于魔羅爾烏野羅甫屢柯佞」の佞が、もし果してその假名ならば、佞は寤と同音の字であるから、これ亦ここに引用すべき例となる。
- (一〇) 引聲阿彌陀經は、古來、慈覺大師が五臺山で習得されたものと傳へてゐるが、大師の入唐求法巡禮行記の中には、之に該當する記事は無い。併し、聲明關係の記事としては、山東省の赤山に於ける赤山院講經儀式・新羅一日講儀式・新羅誦經儀式、山西省の竹林寺に於ける齋禮佛式等に關して、相當に詳しい記載が見えるのである。(天台宗顯揚會編「慈覺大師」所收大屋徳城氏論文「慈覺大師と聲明」参照)。
- (一一) 吐蕃の音譯例自體の中にも、難 *ʔan*, *nan* 編 *de*, *no* のやうに、發音上に多少動搖の存したことを思はせる例がある。又、[m] と [mb] の差異や、[n] と [nʔ] の差異は、唐代の秦音を寫したものと稱せられる慧琳一切經音義に於てさへも、反切の上には全然表されてゐない。恐らく、これら各二つの音は、支那人自身にとつては、相異なる音韻として意識されてゐたわけではなく、前に書いた漆宗棠氏の場合と同様に、同一音韻の二つの相異なる音聲的實現に過ぎなかつたものであらう。併し、隨右の吐蕃や西域渡來の眞言祖師たちや本邦人の渡唐者など、外國人の耳には、その發音上の差異が明瞭に感ぜられたのである。

昭和十九年七月十五日 印刷
昭和十九年七月二十日 發行

國語音韻史の研究

◎ 定價七圓八十錢

特別行爲稅相當額七十錢

合計 八圓五拾錢

(一四五〇部)

出文協承認 あ460208



著者 有坂秀世

發行者 清水達夫

東京都澁谷區大和田町四十二番地

印刷者 北川武之輔

東京都京橋區銀座四丁目四番地

印刷所 (東東六〇) 細川活版所

東京都神田區淡路町二ノ九

發行所

東京都澁谷區大和田町四十二番地

振替東京八三九三三
電話澁谷三八〇二
會員番號一三四〇一一

明世堂書店